

桜蔭俳話会 五月句会 (第三一五回)

鎌倉吟行 秀句鑑賞

白シャツへ移る潮の香バス待ちぬ 友子

白シャツと潮の香の取り合わせが良い。夏の強い日を浴びながら、いつ来るかも知れないバスを待っているのは、ひたすら辛い。評者ならば、タクシーを拾って一刻も早く現場を立ち去りたいところであるが、そのタクシーでさえ渋滞に巻き込まれたのか、一台も通らない。

じりじりとしながらバスを気長に待つしかないという運命に気づいたときには、もう遅いのだ。しかし、作者はこの運命を肯定的にとらえている。バスを待っている間も、日常の己を解き放つような潮の香に包まれており、それが白シャツに、また、己が身に染み込んで行くようである、と捉えているのである。

情景としては、海岸沿いに国道が通っており、その国道の端の吹きさらしのバス停に佇んでいる二人連れを連想する。その二人はバス待つあいだ寡黙であり、海岸での充実した時間の余韻に浸っているのである。

十葉や百基あつめし五輪塔 秀一

俳句では実際にカウントしたかどうかは別として、個体数が多いときに五十とか八十とか百の数詞を使うことが多い。掲句でも恐らくそうであろう。この句のうまいところは、五輪塔の「五」と十葉の「十」と百基の「百」というように数詞を三箇所使用し、いずれも上五、中七、下五の語句の頭韻になっていることである。よく言われるように俳句は韻文であり、音調・リズム感も大事な要素である。掲句は、俳句を良くするための技法が取られている。無意識下にこのような韻律の設計ができたとするれば、俳句修練の賜物と言ってよい。

「あつめし」とあるのは、五輪塔が整然として、すなわち中心軸が鉛直に立てられ、空輪、風輪、火輪、水輪、地輪が順序正しく配置された状態で集められているのであろうか、それとも無縁塚すなわち寄せ墓のように無秩序に積み上げられているのだろうか。恐らく後者であろう。それだけに余計に諸行無常を感じる。

夏草や内藤家墓所錠固し 守

光明寺の内藤家墓所を訪れたとき、雑草の茂りに圧倒された(もちろん他の句からもわかるように十葉やからむしのように名前のある草も含まれていたが)。評者自身は足元に自信がないので、道路から墓所の一面を眺めただけであるが、草の茂りの底には蛇や種々の毒虫が横行しているかのような雰囲気であった。このように墓地は荒れ果てた状態にあるが、入り口の門扉にはしっかりと南京錠が施されている。それは錠に難渋するほどの古さであった。このように施錠してまで防護する内藤家墓所とは何であるのかを考えていた時、芭蕉の「夏草や・・・」の句が頭を過ぎった。この句は、夏草と錠固しによって成立するものであるが、実際に事象を目にする吟行の力によって、難渋することなく生まれた(自句自解)

光明寺江戸の木組に夏は来ぬ 直子

江戸期であろうと鎌倉・室町期であろうと、釘一本使わない木組みの建造物に触れるとき、単に歴史の重さを感じるだけでなく、工夫を重ねた先人の偉大さに深く感銘する。ある木組み構造を完成するまで幾たびかの失敗と大きな犠牲があったのであろうが、神社仏閣建築に残る木組み構造をみると、日本の技術力の底流には確りしたものが未だ残っていると、誇らしげに思う。

行き過ぎて戻りて拾う桜の実 邦子

「気が付いて戻る」との句立ては、よくあるものであるが、吟行に来なければ生まれぬ句である。俳句の基本は観察であり、また、季語そのものに直接触れて季語からのメッセージを第一次情報として受け取ることである。別の言葉で置き換えたり、別の場面に転換すること、いわゆる飛躍は、その後のことである。観察や季語の現場から離れた観念的な思弁からは、独りよがりの句もどきが出来ただけである。

材木の座の影いづこサーフィンす

明美

材木座海岸の由来の材木座が跡形もなく、サーフィンを楽しんでいる若者の声があちこちで聞こえるだけである。

世に必要とされるものだけが残り、そうでないものは役目を終えて退場するのみである。用済みの古きものが次の新しきものに座を奪われることは、事物や組織体などにとって、あらかじめプログラムされた内在的宿命なのであるが、人間に置き換えたとき、単純に「用」、「不用」で振り分けられて良いのであろうか、少し脱線して考えてしまう。

夏きざす色取り取りのボードかな ヤエ子

材木座海岸には色とりどりのサーフィンボードが波に乗り、また、砂浜に立てかけられていた。そのときの温度条件や湿度条件が気象観測所から発表されなくても、夏の兆しを体感した。真夏の砂浜は、あの年代を超えると生命身体の危険を感じる程であるが、吟行当日は夏兆すに相応しく、砂浜に踏み込んだ連衆には気持ちの良い風が吹き渡っていた。

葉桜の風さやさやと銅の屋根

幸

銅葺きのどっしりとした屋根とさやさやと揺れる葉桜との取り合わせがよい。

この句のさらに良い所は光明寺とか具体的な建造物を特定せず、銅の屋根と葉桜の質感、色の微妙な対比だけによって句を成り立たせているところである。今回の吟行に参加しない者でも句を理解し、鑑賞できるものである。

(文責 代表 増田 守)